

与謝蕪村の未発表書簡

俳諧再興へ 名古屋の俳人と尽力

江戸時代中期の俳人、与謝蕪村（1716〜83年）の未発表書簡が見つかった。蕪村は名古屋の俳人、加藤暁台（1732〜92年）とともに、一時低迷した俳諧の再興に力を注いだ。書簡は、2人が同じ方向を見据えて活動していた様子がうかがえる内容。金城学院大（名古屋市）の寺島徹教授が写真、近世文学が、和古書の入札会で発見して入手し、10月に東京であった俳文学会全国大会などで発表した。



金城学院大・寺島徹教授が発見

おおらかな人柄 魅力も伝える



名古屋の俳人・加藤暁台との結び付きをうかがわせる与謝蕪村の書簡＝名古屋市守山区の金城学院大で

加藤暁台 尾張藩士の一族に生まれ、20歳ごろに俳諧を学ぶようになった。藩士として仕えていた尾張藩の江戸屋敷を去り、諸国を巡って句作に取り組んだ。その後、名古屋へ戻り、現在の名古屋市中区にあった小さな屋敷を修理し、拠点とした。40代半ばから京都にも拠点を設け、名古屋と行き来しながら活動したとされる。「月も見え雪も降り出てなく千鳥」などの句を残した。

俳句や複数で句を詠む「連句」などを総称する「俳諧」は江戸時代の娯楽の代表だったが、芭蕉の死後に低迷。「さび」「軽み」といった芭蕉の精神性に光を当て、低迷打開を目指す「蕉風復興」と呼ばれる運動が各地で展開された。蕪村は京都、暁台は名古屋で中心となって運動に取り組んだと伝わる。書簡は、蕪村が1783年は暁台で、蕪村が力添えする

に交流のあった丹波篠山（兵庫県）の俳人に宛てた一通。暁台が主体となつて東北から関東の各地で催された芭蕉の法要に言及。法要で詠まれた連句や、蕉風復興の賛同者から募った俳句を書物にまとめる構想があり、掲載用の句を自らに送るよう丹波篠山の俳人に依頼している。書物にまとめる構想も中心は暁台で、蕪村が力添えする

様子うかがえる。寺島教授は、蕉風復興は当時の俳諧で主流の動きだと指摘。一方で中核を担った暁台は一般に知られておらず、「当時のメインストリートの中心にいて、蕪村とも深いつながりのある俳人が名古屋にいたことに光を当てられたら」と話す。寺島教授は、蕪村が別の俳人に宛てた75年前後の未発表書簡1通も発見、入手した。弟子や交流のある俳人の作品を句集にまとめようという句を送つてもうったが、紛失したとして再度送付をお願いする内容。寺島教授によると、蕪村は句作や他人の作品の評論では論理的だが、おおらかな性格だと伝わっているといい、「蕪村の磊落さが見て取れる。これも魅力の一つ」と説く。（諏訪慧）